

『日本アジア研究』第11号（2014年3月）

退所者どうして結婚したけれど…… ——ハンセン病療養所退所者女性からの聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

国立ハンセン病療養所から退所、社会復帰して暮らす60歳代後半の女性のライフストーリー。

匿名希望Aさん（女性）は、1943（昭和18）年、九州地方生まれ。もの心つく前に、父親が星塚敬愛園に入所。母親がひとりて百姓をして子どもたちを育てた。Aさん自身も、1956（昭和31）年1月、小学校6年生のときに、敬愛園入所。長島愛生園の岡山県立邑久高校新良田教室に5期生として学ぶ。大阪大学の研究所で働けることになったが、敬愛園の父親が癌になり、医師から看病を勧め手紙がきて、わずか1年の勤務で敬愛園に戻る。父親の葬儀の場面で身の内の対応から「実家に自分の居場所はない」と思い知らされ、故郷を捨てて、駿河療養所に入る。23歳のとき、新良田教室時代に知り合っていた退所者男性と結婚、静岡で暮らす。ハンセン病患者であったことを隠して生きる生活のなかで、さまざまな不条理の体験を重ねる。

Aさんは初めての子を妊娠したとき、ハンセン病を嫌っていた夫と姑の反対にあい、中絶。ふたたび妊娠。産む決意を固めるが、不安が募り、医者にはハンセン病の既往症があることを相談したところ、すぐさま駿河療養所に連絡されてしまう。病院を替え、難産の末、女兒を出産、吸引した際の医師の処置の不幸により、聴力を失って生まれている。——その後、Aさんは男の子を2人産んだ。

ハンセン病違憲国賠裁判が始まる少し前のころ、年老いた母親の世話もあって、夫と別居し、故郷に戻ってから、自分の子どもたちやごく限られたひとにのみ、自分自身の病歴を打ち明けるようになった。

聞き取りは、2012年9月25日、星塚敬愛園の面会人宿泊所「星塚荘」にて。聞き取り時点で69歳。聞き手は、福岡安則、黒坂愛衣、足立香織、豊田みなみ。——自分のライフストーリーを「洗いざらい」他人に語るのは、はじめての体験だったという。聞き取りに応じることを約束したものの、聞き手は「いったい「どんなひとか……」と思いまどいもし、また、何を話したらいいのか、ちゃんと話せるだろうか」と、「今朝の2時ごろまで、ああだった、こうだったって、考えちゃったりした」とのことであった。

2013年3月17日、やはり敬愛園の「星塚荘」にて、原稿確認の作業をし、匿名化を条件に公表の了解をいただいた。なお、補充の語りは《 》で表記した。

キーワード：ハンセン病、退所者、ライフストーリー

* ふくおか・やすのり、埼玉大学名誉教授、社会学

** くろさか・あい、埼玉大学非常勤講師、社会学

本稿はJSPS KAKENHI Grant Number 22330144, 25285145の助成を受けた研究成果の一部である。

もの心つく前に父親が敬愛園に入所

〔昭和〕18年〔の生まれ〕です。69〔歳〕になりました。

〔うちの仕事は〕百姓でした。蜜柑（みかん）と枇杷（びわ）ですね。と、漬け物用の干し大根。お米も麦もつくってましたけど、米は陸稻（りくとう）〔でした〕。野菜も〔うちで食べる分を〕なんでもつくってました。

〔暮らしぶり?〕いや、それは、父親が、やっぱり、ハンセンでしたので。です。母親1人が〔農業を〕やってましたので〔生活は苦しかったです〕。わたしのちっちゃいときから〔父は、ここ、星塚敬愛園に入りました〕。だから、わたしは、ここへ、よく、赤ん坊のときから〔母に連れられて〕来てました。〔うちで父親と一緒に過ごしていた記憶は〕ないです。たぶん〔わたしが生まれてしばらくは、うちに〕いたらしいんですよ。ていうのは、父親の耳がですね、右の耳だけが長いんですよ。わたしが、いつも、右の耳を痛いぐらい引っ張ってたらしいんです。父親が言うには、「右の耳が長いのはおまえのせい」って。でも、わたしがもの心ついたときには〔父は家には〕いなかった。で、敬愛園に1年に1度は〔来ていた〕と思います。来てたのは、冬。赤ん坊のときから来てたので、まあ、かわいかったらしいですよ。それで、みなさん、ほら、赤ちゃんなんて見たことないでしょ。だから、ものすごく、みんな、抱っこして〔かわいがってくれて〕。——そのとき、ほら、戦時中でしたので、栄養不足で。それに、〔わたし〕腸チフスを赤ん坊のときにしたらしいですよ。〔よく生き延びられたものだと思いますね。〕

〔敬愛園に来ての、父親との面会は〕内緒で、裏から来てました。だから、面会所を通るってことはいっさいなかったですね。〔母はここへ来ると〕一晩泊まって。〔当時は、男の人たちが何人も一緒にいる寮でしたけど〕そのときには、みなさん、遠慮なさって、父親1人にさせてたですよ。気を遣ってらしたんですね。〔母と一緒に来てたのは〕わたしが入園するまで。〔わたしが入園したのは小学校〕6年生の、冬でした。3学期が始まる前に。——〔当時の入園者のみなさんの症状は〕すごかったです。わたしも覚えがある。もう、見られないぐらいなのね。ほんと、顔から手から足から。恐かったぐらいでしたものね、そのひとたちを見るのが。

父親のところに来るのにたいしては、やっぱり、そうっと、出てきたんですよ。とにかく〔近所のひとに気づかれないように〕そうっと、出てきた。〔敬愛園までは〕船で〔古江の港まで来て〕。もうね、棧橋、恐かったですよね。細い棧橋がこうあって、それへ波がチャブチャブチャブチャブ。それを渡ってくる。で、こんどは、汽車に乗って、長野田〔駅〕まで来て。また、そこらが長いんですよ。遠いんですよ。〔自分で歩けるようになってからは〕おぶってはくれない。ひとりで、自分の足で〔歩く〕。母親は荷物を持っていますのでね。いやあ、遠かった。すごい遠かった。まだかしら、まだか、っていう感じで。

〔父親の病気については〕説明っていうのは、なにもなかった。「らい病」っていうこと自体を知らなかった。ただ、〔父親は〕ここにいるから、って。それで、父親のところへ行ってきたっていうことも、絶対、誰にも言っちゃいけないような、暗黙の了解といたしますかね、そういう感じでしたよね。ある日、突然、連れていって。で、帰って〔きて〕。でも、それはひとに言っちゃいけ

ないっていうこと。

〔わたしのきょうだいですか？〕正確に言いますと、あの、うちの父親も母親も、連れ子をもつての再婚どうしです。それで、そこで生まれたのが、わたし1人なんです。〔父の連れ子の〕姉が〔1人〕いて、〔母の子が〕男4人。だから、6人きょうだいですね。〔11歳年上の〕姉は、中学校を出てすぐ、よそに働きに行ったんだと思うんですよね。わたしが敬愛園に行くときは〔うちに〕いなかったです。で、兄貴が4人おったですけども、上の2人は〔母が〕最初に嫁いだところにおいて、下の兄貴2人を連れて〔の再婚〕でしたね。〔母は〕男勝りで、男には負けていられないっていう性格でした。

父親は、横浜かどこかに行ってまして、そこで結婚して。で、「らい」ちゅうことがわかって、その最初の奥さんには逃げられたらしいんですよ。ていう、母の話ですよ。だから、姉を連れて父親が〔故郷に〕帰ってきた。で、うちの母親も、ちょうど、最初の夫（ひと）は亡くなって。まあ、うちの父親と〔母が〕最初に嫁いだ夫はですね、父親違いの兄弟だったらしいんですよ。それで、母親が、なんか姑（しゅうと）いじめされていて、かわいそうになって、「うちに来ないか」っていうことで、来たらしいですね。

〔母の〕最初の旦那さんは〔父親の〕弟になるんですが、肺結核だったらしいんですよ。だから、母親がよく言うには、「わたしゃ、最初〔の夫〕は、肺結核で、寝たきり。その看病をした」。——田舎でも、わたしら、そういう肺病のひとがいると、そこは、「鼻をつまんで、逃げるようにして行け」って言われてた。そういう感じでしたよね。——で、いちばん最初はですね、父親も、そんなには悪くなかったみたいですね。らい病ってわかったときもね。だから〔うちの父がハンセン病だってことで、近所からつきあいを避けられるようなことは〕いっさいなかったです。〔ただ〕わたしがもの心ついたときにはもう、〔父の〕顔も崩〔れて〕、ちょっとこう、変な、ペシャッとったりしてたんですけどね。いちばん最初は、そんなの全然なかったみたいですよ。だから、たぶん、父親がらいということは、世間のひとは知らなかったみたいですね。

《〔父は、帰省は一度もしませんでした。〕いっさい。だから、わたしたちが〔面会に〕来てたっていう感じですよ。わたしのうちの前のうちのひと、もう80すぎの方なんですけどもね、その方がよく父親のことを言うんですよ。子どもがものすごく好きだったみたいなんですよ、父親も母親も。近所の子たちが家にあがってきて、何しようが、ぜんぜん怒りもしなかったらしいですよ。で、父親は踊りが好きで、よく、踊りをね、見せてくれたりしたって。そういうことは言いましたですよ。父親のことをそう言って、「いつも、ほんとにやさしいお父さんだった」って。で、「どこへ行ったんだろうね？」って話はいっさいしない。——どうなんでしょうねえ？ 知ってる〔のか、知らないのか〕。聞くわけにいけないので〔わかりませんが〕。

母親が〔面会に〕来ると、よく、この一年、どういふふうにするかっていう計画をね、ふたりで話をしていましたよね。だから、夫婦っていうのは、お互い、ふたりで、いろいろ話をするものだっていうふうに思っていたんですけども。〔自分が結婚してみたら、違っていました。〕でも、まあ、父親というひとは、すごく短気なひとで、物を投げたりしたって、そういうことを母親がチラッとやったことありましたけども。〔母親には、ハンセン病への偏見がなかったのか、ですって？〕母親は、「人間というのは、四百四病（しひやくしびょう）

の病いを持ってるから」って。「とにかく、いろんなものを、人間持ってる」って。》

昭和31年1月、小学校6年のときに入園

〔小学校のころのわたし?〕甘ったれの、さびしがりや。とにかく母親が朝早くから〔晩〕遅くまで畑へ行ってますので、いつも〔母の帰りを〕待ってるっていう感じでしたよね。学校は、好きとか嫌いとかじゃなくて、とにかく行かなきゃいけないんで〔行ってるという感じでしたね〕。

〔最初の症状ですか?〕いちばん最初は、母親にも言わなかったんですけど。むかしは、裸足だったですよ。で、ある日、足の裏が半麻痺っていうのか、わたしなんか「半痺れ」っていうんですけどね。完全に麻痺してるんじゃない。そのときはすごく痛いんですよ。ちょっと摘(つま)んだだけでも痛いんです。足、土に付いたら、もう痛くなって、痛くなって、たまらなかった覚えがありますわね。それが、たぶん、夏ごろからじゃないかなと思うんですけども。

うちは五右衛門風呂です。釜が大きい鉄でできてンですよ。それで、〔左の〕肘をね、〔熱い鉄の釜に〕当てたらしいですね。火傷したのが、そのときはわからなくて、朝、着替えをするときに、〔火傷したところが〕ベタッて。それで気がついて、母親がもう、すぐ、敬愛園(ここ)へ連れてきたんですよ。〔それが小学校〕6年生の、お正月すぎてすぐですよ、寒いとき。

〔学校の友達に「さよなら」も言わずに、でした。〕だから、突然いなくなった感じですね。ちっちゃいときからの近所の友達も、どこへ行ったのかなっていう感じだったらしいんですけども。でも、母親はいいさい、ひとつ言も、そのことについては触れなかったらしいです。

出産をめぐるの不条理

わたしは、従姉(いとこ)がおって。母親の兄さんの子ども。わたしよりも3つ上ですね。その後ぱっかりくっついてたんですよ。それが、突然〔わたしが〕いなくなったので、びっくりしたらしいんですよ。どこへ行ったんだろうって。〔ずっと後になって〕その従姉に、「おまえ、ほんとに、どこへ行ってたんだ」って言われましたので、「じつは、こうだった」ということで、従姉にね、言いました。「おまえは、どこへ行ってたのかね」って。「おばさんにも、そういうことは聞いちゃいけないって、子ども心に思った」って。「だから、いいさい聞かなかった」って。——〔その従姉に打ち明けたのは〕母親が高齢になって、それで〔わたしが故郷へ〕帰ってきたとき。母親が亡くなって、もう10年ですので、10年以上にはなりますね。

〔従姉に打ち明けた心境?〕そうですね、そのときは、わたし1人で〔故郷へ〕帰ってきたので、ああ、従姉には言ってもいいかなあって。もうこれ以上は隠しておれないなっていう感じですね。それまでは、もう、とにかくガードしてましたね。ガードしているのは、あの、結婚して、そのときに、身内も誰もいないところでしたので。で、姑、小姑なんかもおって。ほら、妊娠すると、やっぱり、いろいろ不安じゃないですか。《〔自分の病気が〕重くなるんじゃないか、というのもあったし、子どももまた「らい」になるんじゃないか、とかね。いろいろなものが混ざり合って、どうしたらいいか》ものすごく不安になっちゃって。で、駿河療養所の石原〔重徳〕園長先生に叱られたんですけ

ど、産婦人科ですわね、もう、ほんと、わたしもバカなんですけどね。とにかく、自分がすごい不安で不安で、もうどうしようもない、相談するひともいないって感じでしたのね。その産婦人科の先生、女の先生だったし、その先生は養女だったんですよ。それで、クリスチャンだったんですよ。だから、あ、この先生にはね、言ってもいいかなと思って。つい、言っちゃったんですよ。「大丈夫でしょうか。らい病だけ」って。そしたら、すぐに、駿河療養所に連絡が行っちゃったみたいで。それで、もうね、石原先生から「なんでそんなことを言った！」というて怒られ、主人からもものすごく怒られ。もう、ほんと、はあ……。《[その女の先生には]「らい患者」そのものに、やっぱり、こう、偏見というのかな、そういうのがあったんじゃないかなあ、と思われましたねえ。だって、[後で実際にこの目で見ると]カルテには、大きく「ライ」って書かれてましたからね。》

大きい病院がいいと思って[大病院の]産婦人科に[かかっていたんですが]、まだ生まれないうちだったので、そこから、こんどはバスを乗り継いで乗り継いで[行く]個人病院で産んだんですけども。また、ウーン……。[言いよむ]そこでは、[わたしの]病気のことは、いっさいも言いませんでした。だけど、わたし、お産がきつかったんですよ。そこで帝王切開していただけりゃあよかったんですけども、個人病院でしたので、してもらえないで、吸引分娩をして。仮死状態で生まれたんです。それで、へその緒から、もうなにもしない状態で、[赤ちゃんになにかの]注射をして、はじめてそこで「おぎゃあ」って泣いたんですよ。で、そこから、バイ菌が入って。で、敗血症になったんですよ。で、耳が聞こえない。だから、聾(ろう)の子どもに。でも、いちばん最初はぜんぜんわかりません、そういうことも。3ヵ月間、子どもは[さっきの大病院の]未熟児センターで、ガラスの保育器へ入っていたんですけども。

そして、耳が聞こえないっていうのがわかったのは、年子(としご)で子どもを産んだんですよ。そのときには、個人病院ではダメだったというんで、また[その大病院へ]入ったんですよ。なぜ[その病院へ]行ったかっていったら、[最初のときの女の]先生は、ちょうど博士号を取るためにいなかったんです。男の先生が担当でした。そのとき、わたしが分娩台へあがったときにそれがわかったんですけども、カルテに大きくカタカナで「ライ病」って書いてあったんですよ、赤い字で。それこそ、誰が見てもすぐわかる状態ですわね。でも、その先生は、いっさい、そういうことはおっしゃらなかったんですよ。だから、ほんとに、すごくいい先生がいらしたんだあって。[前の女の]先生は、クリスチャンでありながら、「らい病」っていうのを嫌って、そうやって、あれしたんだろうけども、こんどの先生は、そういうこともなくね、ほんとに、一生懸命してくださったんですよ。そのときもやっぱり、お産が大変で、先生2人がかりでしてくださったんですよ。だから、2番目の子はなんともなく[生まれて]。その子を見てはじめて、ああ、長女(このこ)はおかしいっていうことわかって。耳が聞こえないって、実感したんですよ。

それまでは、わたしも、赤ん坊っていうの、見たこともないし、扱ったこともないっていう状態で。どういうふうに扱っていけばいいか。寒いときも、暑いときも、洋服を着せるのから、布団から、どういう具合にあれして[いいの]か、とにかく、ひとつもわからなかったんですよ。もうそういう状態で、なんとか、こう、教わってきたんですけど。だから、ほんとに、あの子、

ガラガラをこうやっても、振り向かなかったんです。乳児検診なんかで〔3ヵ月検診〕ありますよね。保育器に入っていたんで、小児科の先生には、ずっと診てくださっていたので。「先生、耳が聞こえないってことないかって〔主人の姉妹に〕言われたけど」って言ったんですけど。《わたし自身も、下の子を産んで、様子が、ゼンゼン違ってましたのでね。だから、アレって思いまして、先生にそう言ったですよ。しかし、先生は》「いやあ、そんなことないと思うよ」って。寝かしておいて、こうしてすると、やっぱり、もう、目の前ですの、子どもが反応（こう）しますよね。「〔だから〕大丈夫」って。

で、年子で産んだんで〔おかしいなって思うようになって〕。下のおんぶして、おねえちゃんを抱っこして、耳鼻科へ行っただけ。そしたら、あのときも、もう、ほんとに、辛かったですよね。患者さんたちがずらっといるんですよ。そこで、わたしがこうして抱いてると、先生が後ろに行って、音を鳴らすんですよ。それをみんなこうして見てるじゃないですか、興味深くね。そして、「あ、この子は耳が聞こえない」って。言われたときはね、もう、ほんとに、すごいショックでした。ほんと、どうしたらいいか。辛かったですね。わたしはらい病で、また、子どもは耳が聞こえない子。ああ、ほんと、世の中、こんなに神さまっていうのは辛い思いをさせるのかな、って思いましたけどね。で、看護婦さんに、「聾学校というところがあるから、連れていって、訓練をしてください」って言われたですよ。だから、ほんと、いつつ、この子をなんとか一人前にしなくちゃいけない。もう、とにかくもう、〔涙声になって〕夜は泣いてたんですけどもね。でも、泣いてばかりはいられませぬのでね。とにかく、この子をなんとかしなくちゃいけないっていう、その一念だけでした。だから、聾学校には、小学校にあがる前から訓練をするところがありまして、それで、訓練に通いました、毎日ね。

《〔聾学校は〕自転車で真っ直ぐ行けば、20分かからなかったかな。それを、バスで乗り継いで行くとすると、〔ずいぶん〕掛かりましたよね。だから、そのときには、自転車に乗れなかったのを、自転車乗るようにして。後ろに子どもを〔乗せて〕。——自転車って、昔は高かったですからね。わたしなんか、乗ったことなかったですよ。〔でも〕母親っていうのは強いもんですねえ。そう思いますよね。乗ったことないのを、とにかく、足を付くように〔してでも〕乗るように〔しました〕。》

〔子どもは〕上が女の子で、あと2人〔男の子が〕いるんですけども。

少女舎で暮らす

〔話を元に戻しますと〕小学校6年のときに〔母親に敬愛園に連れられてきたときは〕入所っていうのは、ぜんぜんわたし自身はわからないで、ただ、連れてこられた。〔父に面会に来るのとおんなじ〕感じで。〔でも、敬愛園に〕来て、すぐ伊藤利根太郎先生の診察を受けて。〔といっても、どんな〕診察を受けたのかも覚えてないんですよ。ただ、伊藤先生、目が大きくて、おっきい先生でしたからね。そのことだけを覚えてますね。

〔診察で針で突ついたりとかって〕そのときは覚えてないんですけども。高校、〔長島の新良田教室に行ったときに〕愛生園で〔診察があつて〕、そのときにひどいめにあいましたよ。やっぱり、〔針で〕チクチク、新入生全員やられて。で、上半身裸で、写真撮られて。で、こうしてね、先生が触って。

嫌な思いでしたけど。〔診察した先生は〕光田健輔園長でした。

小学校6年生で〔敬愛園に〕入ったときに、母親と父親に言われたのは、「もう、帰ってきちゃいけない」って言われた。「手紙も出しちゃいけない」って言われた。とにかく「出ちゃいけない」。だから、とにかく縮こまっていたっていう記憶ですね。

〔名前も〕偽名にしました。父親は本名でした〔けど〕ね。あのとき〔偽名を勧めたのが〕父親だったのか母親だったのか、〔あるいは〕まわりから、だったのかな。覚えがないんですけどね。〔わたしとしては〕偽名にしないといけないのかなあ、そんなもんかっていう感じでしたよね。

少女舎〔に入りました〕。あのときにねえ、覚えてるのは、わたしと同じ年の子が1人がいて。そのあとに、わたしよりも1つ上の女の子が2人、入ってきて。あたしなんかより上は〔その〕2人だけでしたよね。それから、下が、覚えてるだけで、3人か4人入ってきたかな。

それで、とにかく、先生たち、白づくめでしょう。で、どこへ行くにも、消毒液の臭いがするでしょう。そういうののほうが、ものすごく〔印象が〕強かったですよ。〔それで、園内の学校の〕職員室には〔わたしたち生徒は〕いっさい入れないです。先生は〔みんな〕雨靴も履いてね。ほんとに完全武装で。頭から〔足元まで〕。そういうのがすごい、強烈でした。

〔入所したときの自覚症状は〕麻痺。だから、左肘（こ）〔を火傷していて〕。それから、左手に結節があって。〔治療は〕プロミンです、ずっと。だから、ここに、注射の痕〔が残ってます〕。これがもう、外へ出てからは、いちばん嫌でした。お医者さんにかかるの。血液検査なんかするでしょ。そのときに、もう、こっちとこっちとね、注射の痕があるじゃないですか。〔とくになにか言われたことはないですが〕「硬いねえ」とは言われましたよ。もう、知らんぷりしてました。だけど、ものすごく嫌でしたね。

〔プロミンは〕毎日でしたよ。少年少女舎と一般舎とは分かれてて。で、こっちへ行くのが医局のほうへ行くのでね。で、そっちのほうは、ジメジメしてね。消毒液とかあんなのやったりね。嫌あなとこでしたよね。〔わたしはプロミンによる〕反応はなかったです。ただ、神経痛みたいなのは、来た、覚えはありますよね。

〔わたしが入所したころの食事？〕缶詰は、よく覚えてますよね、出たのはね。鯖（さば）〔の缶詰〕かなにかじゃないかな。で、少女舎のお母さんがね、すごく、子どもたちのことを考えてくれて、いろんなのをつくってくれて。だから、ひもじい思いは、覚えがないですよ。

〔少女舎の〕お母さんは、〔わたしたち子どもには畑仕事とかは〕させなかったですよ。〔だから、普段の生活っていうと、治療に行つて、学校でお勉強して、あとは〕遊ぶ、でしたよね。〔遊ぶのは、園の〕中です、もちろん。ただ、すぐ後ろに畑があったんですよ、外のひとのだけどね。そこ、丘があって。そこでよく遊んだのを覚えてますけどね。外に出るといのは〔せいぜい〕そのぐらいです。〔もう、外に出ちゃいけないんだっていうのは〕すごく頭にありますよね。見えない塀があったような感じですよ。——高校（がっこう）を卒業して、〔阪大で〕働いて、で、父親の面倒をみるために帰ってきて。それからね、外に遊びに行ったりということはありましたけどね。そのときはもう、自由でしたものね。そんなに、監視っていうのかな、そういうのが〔き

つくなくなっていた]。

〔園内の学校は、外の学校に比べれば生徒が少なかったけど、わたしたちのときはクラスは〕学年ごとでしたね。あのときは子どもたちが多かった。少女舎のほうは少ないけど、少年舎のほうは多かったのよ。

〔園の中で父とは〕面会時間ていうのかな、親に会いに行くっていう時間があるんですよ。ほとんど毎日じゃなかったですか。とにかく、お菓子が目当てで〔会いに〕行ってましたね。

新良田教室で4年間を過ごす

〔園内の中学校を終わったら〕わたし、もう〔外の社会に〕出るつもりでいたんですよ。〔当時、昭和30年代なかばには〕みなさん、黙って、こう〔外へ出ていくひとが多かったです〕。ですから、わたしも出るんだって、自分でそういうふうに決めたんですけどね。で、〔母は〕定期的に〔敬愛園に会いに〕来てくれていて、わたしが「中学校で〔外に〕出たい」と言ったら、母親は「それでいい」と言っただけですけども、父親がね、「ダメだ。いまの時代は、高校ぐらい出てないとダメだ」と。もう父親が、とにかく、絶対的な権威があったみたいよ。〔だから、わたし自身は新良田教室に〕行く気はなかったんですけども、そう言われて、高校へ行ったんです。

〔わたしは新良田教室の〕5期生です。受験勉強を一生懸命しましたよ。アハハハハ。それなりに。あのね、T先生って男の先生がいらして、〔放課後に受験の勉強を〕教えてくれて。それで、一般舎のひとと一緒に勉強したんです。

〔わたしのとき敬愛園から受験したのは〕あかしでしょ。同い年の子でしょ。〔ふたりは合格。〕それから、同級生の男2人も〔受験したんですけど〕、これはダメで。〔あと2人、一般舎のほうから受けた男のひとと、少女舎の「お姉さん」をしていたひとが合格して。〕

〔鹿児島から岡山へ行くときは〕もちろん、御召列車でした。乗り心地ですか。最低ですよ、ほんと。その貨車から外に出られないしね。夜は、ホームの端っこのほう〔に停められて〕。とにかく、家畜とおんなじような感じですよ。

〔岡山駅に着いたのは〕夜中ですよ。〔そこから〕バスで〔虫明(むしあげ)へ〕。船も、職員と患者とは別でしたよ。真っ暗でしたから、どこをどうやって来たのかも、ぜんぜんわからん。だから、「島流しにあったねえ」なんていう感じですよ。変なところへ連れてこられた、って感じで。敬愛園、ほら、開放的でしたでしょ。で、園に入っても、〔愛生園は〕ものすごく封建的で。職員なんかもう、敬愛園(ここ)よりももっとひどかったですよ。すごい差別された。すごく、そういうに思いました。帰省願いを出しにいくんですよ。そのときの横柄な態度っていうの。親切心は、いっさいない。〔そのとき以外に〕職員と接触するっていうのはなかったけど、とにかく、垣根っていうのは、すごい感じてたですよ。威圧的な態度(なに)もあったしね。

〔5期生は〕何十名いたかな。〔一学年の定員は30名でしたけど〕5期生、いちばん多かったですよ。女性は少なかった。女性は、10人いなかったですよ。

〔新良田教室の時代は〕職員がいるほうへ行けば、あれでしたけど。そうでないかぎりは、ほんとと自由でしたから〔楽しかったです〕。一般舎のひとたち

も、すごく大事にしてくださったし。だから、ひもじい覚えも、ほんとに、しなかったですね。ほんとに、もう、よくしていただきました。〔一般舎の方のところに〕もう、毎晩行ってましたね。アハハハハ。

〔それは〕いちばん最初、先輩が紹介して連れていってくれて。それで、そこへ行っていると、そこへまた、ほかの一般舎のひとが遊びに来て。そのひとが「うちに来い」って言って。もうほんと、親と娘みたいにしてもらって。いろんなことも教えてもらって。素麺の湯掻き方とか、巻き寿司の〔作り方〕、そういうのとか、ベッタラ焼きっていうの。小麦粉の、お好み焼きですよ、まあ、言えば。〔その〕具がないの。ほんと、すごくかわいがってもらったですよ。

〔新良田教室は〕文化祭もすごく賑やかでしたよね。踊りを踊った。ちゃっきり節だったかな。〔愛生園の〕入所者のひとたちも一緒に。入所者の方に協力して〔もらって〕教えていただくんです。そういう感じでしたよね。高校生だけっていうんじゃないくてね。

〔わたしたちのときはまだ修学旅行は〕なし。行ってません。いちばん最初に愛生園へ新入生で来たときに、歓迎会っていうので、〔大島〕青松園へ行った。のと、それから〔同じ長島にある〕邑久光明園。それだけですよね。〔外へは〕ぜんぜん出てないです。

〔夏休みなんかの里帰りでは〕わたしは敬愛園に父親がいたんですけども、敬愛園には帰ってこなかったですね。〔母のいる〕うちに帰った。でも、うちへ帰っても、ただ帰ったっていうだけで、外へ出られないんですよ、家から一歩も。じっとおとなしく〔しました〕。とにかく、わたしが〔うちに帰って〕いるっていうこと自体が、世間〔に知られないように〕。

〔新良田教室の〕勉強で面白かったの、べつにないです。ただ、英語はどっちかというところ好きだったですよ。英語の先生が面白い先生で、特徴のある先生ですよ。国語はあまり好きじゃなかったですね。わたしは運動は好きじゃなかった〔から、ピンポンとかは〕あんまりしてないですよ。

一般舎のひとたちの舟を借りて〔海へ漕いで出たりとかする〕そういうひとたちもいましたよね。でも、〔わたしは〕行ったことないです。〔新良田教室の男子生徒は、准看護学校の〕生徒さんたちと仲がよかったみたいです。もてたみたいです。うちの旦那もそうだったみたい。わたしは、とにかくもう、暇があると、あたしをかわいがってくれた一般舎〔のひとのところ〕へよく行ってたんですよ。

新良田で夫となる人と出会う

主人も、岡山〔の新良田教室〕で一緒〔だったひと〕。主人の場合は、いま思うと、〔社会復帰後〕あれだけのものすごく不摂生（ふせっせい）をしたのに、普通だったら病気が騒ぐのが当たり前だと思うぐらいの不摂生をしたのに、病気が騒がなかったということは、たぶん、間違っただけなんです。

〔主人は〕中学校を出て、石工（いしく）になったらしいんですよ、田舎で。で、間違えて、右手を打っちゃったんですよ。辺鄙なところで、お医者さんもいなかったらしく、お医者さんへ行くのも難儀（あれ）でしたので、〔指が〕曲がったまま、こう、巻いて。ちょっとだけ変形（こう）だったんですけども。使えることは使えるんですよ。だけど、まあ、見た目は〔ちょっとおかしい〕

ってわかる状態]でしたので。たぶん、そういうので、わたしが思うにはですよ、[長島愛生園に]入ってきたんじゃないかなと思うんですよね。

[主人はわたしより]3つ[年上でした]。旦那のほうは、愛生園へ入ってきて、受験というよりも、外で夜間高校へ行ってたので、そのまま[編入で]新良田教室(こうこう)へ入ってきたみたい。[彼は]1年を2回やってるんです。いちばん最初、4期生と[一緒に]やってて。降りてきて、もう1回、わたしたちと一緒に[1年生をやって]。

[彼は]まあ、リーダー[シップを取りたがるというか]、とにかく自分が一番じゃないと気がすまない人間ですね。[本人はリーダーシップがあるんだと]言ってたけど、舎監をやったりしたこともあったですけど、同級生やら先輩には、あんまり評判よくなかったみたいですね。

[で、彼がわたしを気にいって。]そのとき[のわたし]は、もう、「はい、はい」って、そんな感じ。「いや」ってことを言えなかったんですね。で、「結婚してくれ」って。だから、うちのは卒業しないで、[外へ]出たんですよ。「[こんなところを]卒業したってしょうがない。いつまでもここにいたってしょうがない」っていうことで、1年以上前に出ちゃったですよ。[で、家族のいる]静岡県[に戻って]。〇〇電機静岡製作所というのがあるんですけど、臨時工から入って、ずっと真面目に[働いて、本採用になるんです]。

阪大の研究所で働く

わたしは[新良田教室を卒業の時点で]愛生園の事務のほうから世話してもらって、阪大へ勤めたんですよ。あの、「らい」の研究するところに。給料はものすごい安かったけど、姉が大阪にいたので、姉のところから通えるっていうので[そのお話をありがたくいただいて]。わたしは、卒業も早々っていうので、敬愛園には帰ってこないで、そのまま、すぐ行っちゃったですね。みなさん[新良田教室を卒業したら、とにかくいったんは]園へ帰るんですけどね。[わたしは]帰らないで、そのまま、直接。

わたしは「らい病」でしょう。だけど、教授の伊藤[利根太郎]先生も——わたしがほら、いちばん[最初に敬愛園で診察を受けた先生]——ぜんぜん差別もなく、もう[職場でも]いっさい差別なんてなかったのだから楽しかったんですよ。

その年にですね、6月に「救らいの日」ってありますでしょう。その「救らいの日」に放送するって、NHKの全国放送、[愛生園の]高島[重孝(しげたか)]園長と2人で話をして、それ、全国版で流れたことあるんですよ。どんな話をしたのか全然覚えてないですけど。NHKの方、すごくやさしい方でね。何度も打ち合わせをしたんですけどね、ほんとに親身になって相談にのってくださって。《そのときのアナウンサーっていうのかな、行天(ぎょうてん)さんって、すごく有名な男の方でした。[そして]女のディレクターかな、すごく親切でしたね。どっちもやさしかったですよ。》[その放送では]自分の名前は出なかったと思いますよ。それは、伏して、ですね。[ただ]阪大で働いているっていうのでね。

父親を看取るために敬愛園に戻る

[でも]そこに勤めてまだ1年もたたないうちですね、わたしは[敬愛園に]

帰ってきた。〔敬愛園の〕松田〔なみ〕先生から手紙をいただいて。父親が「悪性の腫瘍」なので、帰ってきて、面倒をみてあげたほうがいいですよ、って。松田先生がおっしゃるのじゃ、やっぱ、父親の看病をしないといけないからってということで、仕方なく〔敬愛園に〕帰ってきて、父親を最期まで看取ったんですね。〔父は〕56で亡くなりました。それが、わたしの20歳（はたち）のときです。

家にはいけないと思い駿河療養所へ

ほんとは〔わたしは彼のもとに〕行きたくなかったんですね、そんなにね。——だけど、父親が死んだときに、敬愛園（ここ）でお葬式をして、焼いて、お骨にして、焼き場からそのままうちへ帰ったんですよ。母は、父親の〔お骨を〕分骨したと思うんですよ、ここ〔の納骨堂〕と。で、うちへ帰って、お葬式みたいなのをしたんですよ。で、そのときに、〔父の子は〕姉はよそに〔嫁いで〕行ったので、もう、わたし1人だったんです。〔ところが〕父親の希望で、いちばん下の兄貴を養子縁組してたんですよ。〔家を継がせるために。〕父親の意志でそうしたらいいんですけど、わたしには全然なにも相談なかったんですよ。で、帰って葬式をしてるときに、父親の弟が〔その養子縁組に〕大反対をしたんですよ。すごい、それ気に食わなくて。そのときに、わたしっていう存在（ぞんざい）っていうのは、いっさいなかったんですよ。ああ、わたしは、ここにいちゃいけない人間だ、ってすごく感じたんですよ。兄貴たちもまだ結婚してなかったの、兄貴たちのためにも、わたしはここにおれないと思って。で、初七日が済んだときだったのかな、〔うちを〕出ちゃったんですよ。もう、いっさい捨てた。故郷を捨てざるをえなかった。

〔ハンセン病に罹った〕わたしは、もう、ここに、いてはいけない。わたしっていう存在（ぞんざい）があっちはいけない、って感じたんですよ。だって、兄貴たちがわたしと話すっていうこと全然なかったですものね。こんど〔わたしが故郷に〕帰ってきて、はじめて、いろいろ話をするというぐらいで。でも、兄貴たちは、わたしが「らい病」っていうことは、わかってたんですよ。それは、一緒に住んでた妹がいなくなっちゃったんだから。だから、母親は、たぶんね、〔兄貴たちには〕言ってたと思うんですけども。

それでもう、〔外の社会には〕頼るひとがいなくて、そのときは、駿河〔療養所〕に入ったんですよ。〔新良田教室の〕同級生が駿河にいたので、もうそのまま、ひょっと、身軽な感じで〔駿河療養所へ〕行って〔入れてもらいました〕。〔駿河には〕1年ちかくいたですかね。付添いをしながら。〔付添看護は〕敬愛園でもしたことがあるですね。ほら、一般舎の横に、付添いの部屋があった。〔敬愛園で付添いをしたのは〕父親の看病をしながら〔です〕。少女舎のお姉さん〔役〕もしたりしましたですね。

退所者どうしでの結婚

〔そしたら、社会復帰してた主人が〕手が悪かったので、その手術をしたって〔連絡があって〕、駿河〔療養所〕に入院して〔手術を〕してもらったんですよ。〔そのときに、あらためて、彼から結婚を申し込まれて。〕だから、〔わたしは〕もう、どこも行くところないから。ほんとに、行くところがなかったの。

〔結婚したのが〕23〔歳〕か。結婚生活は静岡で〔始めました〕。結婚式はしませんでした。おカネなかったです。おカネは、ほんと、なかった。主人のほうはね、親たちと同居してたので、働いたおカネはぜんぶ、お母さんに渡してた。貯金、ひとつもなかった。〔わたしたちが結婚したときの〕お義母（かあ）さんの言う科白が「結婚したおかげで、こっちに入ってこない」って。——だから、アパートを借りるおカネ、そういうのもぜんぶ、わたしが持っていたおカネでしました。6 畳一間で、〔炊事場も〕トイレも、ぜんぶ共同。お風呂もなかったですね。

すごく、そのとき〔世の中が〕不景気でしたので、〔主人の〕会社に帰休制度というのがあって。いちおう、毎日、会社に行くんですけどね。給料は、ちょこっと、もらうだけ。〔それで、わたしも〕個人経営のスーパーみたいところで、パートで働いたですね。〔そのときも、ずっと、自分がハンセン病だったことは〕隠してますよ。壁つくってたですよ。〔見てもわからないっておっしゃいますけど〕注射の痕ですね。それと、麻痺が残ってる。〔手の〕ここが脱肉してますね。夏場はですね、顔のこのへんが赤くなるんですよ。まばら状態に。やっぱり、変な赤さ。いまはもう、そんなことないですけど。——〔当時は〕もう、なんか言われても、知らんぷりする。「あ、そう」っていう感じでいました。

〔子ども時代の故郷の話？〕詳しくはもう、いっさい言わないですよ。ああだこうだっていうのは、いっさい話しませんでした。もし、そうなったときは、もう避けてっていう感じで。

〔主人の両親は、わたしがハンセン病だったってことを〕知ってたと思うんですけど。だから、気に食わない嫁でしたから。とにかく、気にいられない嫁で、ずっと来ました。

〔わたしの母には結婚の報告は〕しなかったです。しばらくしてから。子どもが、耳が聞こえないっていうことがわかったときに〔言いました〕。

小泉首相の「控訴断念」に涙

〔平成 10 年に始まった「らい予防法」違憲国賠訴訟？〕わたしは、ときたま、敬愛園（ここ）へ遊びに来るっていう感じでしたので、ぜんぜん〔裁判の詳しいことは〕わからなかったですよ。わたしは、原告（そこ）に参加しようとか、そういう気はいっさいなかったです。

《10 年前に、小泉首相の〔控訴断念の場面が〕ありましたでしょう。》ちょうど、そのときにね、母親はベッドに寝てて、母親もわたしといっしょにテレビ見てたんですよ。《こっちは、やっぱり、涙ぐんじゃったんですけどもね》。母親の態度、どんなだかなあと思って《ハッと見たんですよ。》たら、なんにもなかったですね。だから、がっかりしちゃったんですけどね。もうちょっと、こう、母親が、なんか、あるかなあと思ったんですけども。ひとつ言もなかったですね。あのとき、母親がもうちょっと、「大変だったよな」とか、なにか、こうね、声かけてくれるかなって、そういうの期待をしていたんですね。それがなかったんで、それが、ものすごいショックで。でも、これで、なんか、ホッとしたっていう感じは受けましたけども。

〔原告にならないかっていう〕誘いは〔わたしには〕なかったです。〔裁判に勝った後〕みんなが、ほら、東京へ行って、〔小泉〕首相と〔会って〕。控訴阻

止。〔その後、わたしも、みんなと一緒に〕東京へ行くようになってから、〔第1次原告の〕上野〔正子〕さんやら〔玉城〕しげさんたちと親しくなって、ああ、こういうことだったんだ、って。ほんとにね、申し訳ない。

〔わたしも補償金をもらいました。そのあと、退所者給与金もでるようになって〕それで、ものすごく助かりました。ほんとに、助かりました。もう、そのとき、生活が大変だったので。母親の面倒をみながら、ヘルパー〔の仕事〕をしたりして、生活費を稼いだりしてたので。すごい助かった。〔だから、原告のみなさんに〕感謝してます。ほんとに、もう、どんなにうれしかったか。

子どもたちに打ち明ける

〔いま、耳の聞こえない娘は〕弟とふたりで〔暮らしてます〕。独りで生活するのは、嫌だって。〔その弟は結婚〕してないです。そういう気はないみたいです。もう、わたしどもの結婚生活を見て、アハハハハ、上2人は、結婚しない。いちばん〔下の〕弟だけが、最近、結婚して。〔その息子は嫁にはわたしの病気のことは〕しゃべってないですね。

〔わたしの〕子どもたちにはね、わたしが〔故郷へ〕帰ってきてしばらくしてから、「母さんは、こういう病気だ〔った〕」っていうことをね、伝えました。離婚したんじゃないなくて〔別居生活でしたが〕、わたしがこっちへ来たので、子どもたちはお盆とかお正月にこっちへ来たんですね。そのときにね、3人には、言ったです。母親はもう亡くなってたから、やっぱり、10年ぐらい〔前〕かな。——〔主人も〕もう死んじゃったですけどね。亡くなって1年たったですけど。

〔子どもたちは〕ぜんぜん〔気づいてなかったです〕。もう主人が、とにかく、ハンセン病のハの字が付いたのも、ものすごく嫌ってたんですよ。とにかく隠してた。〔だから、静岡にいたころは、わたし自身、退所者どうしの付き合いも、いっさい〕なかった。〔駿河療養所にいる新良田教室のときの親友とは〕交流してたんですけども。それ以外は、とにかく、新聞なんかでも〔ハンセン病のことが〕出てたりすると、もう、隠して、隠して、隠して。

こんなことがあったですよ。主人は、手が悪かったですよね。で、うちの娘は、耳が聞こえないですよ。それ、言ったことあるんですよ。そしたら、「おれのほうが重症だ」って。ああー、娘のことをぜんぜん考えてないんだなって感じたんですけどね。うちの主人の場合〔子どもを持ちたいっていう気持ちは〕なかったみたい。〔わたしが妊娠したときも〕「墮ろせ、墮ろせ」でしたものね。主人と姑が。だから、いちばん最初の子は、墮ろしたですよ。〔だから、2人目はどうしても産みたかった。〕もう、〔墮ろすのは〕嫌でしたから。〔でも〕自分自身も〔子どもを産むことへの不安は〕すごくありましたよね。やっぱり、病気が騒ぐんじゃないか、っていうのはありましたよね。

〔主人は〕ハンセン病っていうの、とにかく、会社でもばれないよう、ばれないよう、ばれたら困る。だから、健康診断、1回もしてないですよ。本人は〔誤診だったとは〕思ってたんですけども。主人は、島崎藤村の『破戒』、あれをよく言っていました。だから、わたし、ほら、子ども〔を産むとき、産婦人科の先生に〕言ったでしょ。〔それに対して〕「おれは、なんのために、会社で健康診断もしないで、いままできたのか」と。ビクビクしてた。ばれたらどうなるかわからん。〔ばれたら〕勤められないっていうのが、すごくあったみ

たいなのね。

[子どもたちに言ったときの] 反応は、肩透かしくいきました。「あっ、そう」。それだけで終わっちゃいました。「へー」って感じで。[子どもたち] 敬愛園にも連れてきたんですよ。「お母さん、ここ、おったんだよ」って。「ふーん」っていう感じで。なんにも、ぜんぜん。

長男坊は、すごい神経質な子だったんですよ。わたしも面倒をみなかった。この子は耳が聞こえるからいい、っていうのがあったので。どっちかという、娘のほうに目がいって、息子のほうには行ってなかった。だから、長男坊のばあいは、大腸性潰瘍炎にもさしちゃったんですよ、中学校のときに。だから、とにかく、そういう子で、神経が細やかな子だったですけど……。

[下の] 息子は結婚して、わたしの、この「らい」ってこととかそういうことは「いっさい、言うな」って。

話しても大丈夫なひと／話せないひと

[わたしが故郷へ戻ってきて、兄さんたちとの関係はかなり修復された] と思いますね。だけど、帰ってきてすぐ [わかったんですが、いちばん上の兄貴は] 兄嫁に隠してみたいですよ、わたしを。妹がいるっていうことを。[わたしは、兄嫁がもうわたしのことを] 知ってると思って、わたしが帰ってきた時点で、[兄嫁に] 言ったんですよ。[そしたら] 兄嫁が、「わたしやねえ、あんたがいるってことを知らなかった」って。「話、聞いてなかった」って。すごいショックだったんですけど。アハハハ。ああ、そうか、そういうふうに、兄貴は、やったんだなあ、って。

[故郷に帰ってきて、小学校のときの同級生にも再会] しましたよ。あの、[お寺の子どもで本人も] 坊さん [になった人] がいるんですよ。彼がね、[わたしの] 母親に問い詰めたことがあるらしいんですよ。わたしが敬愛園(ここ)へ入ってるときにね。「Aさんは、どこへ行った？」って。そのときも[母は] 黙ってた、って。で、お婆の葬式のために再会したんですよ。[その] 坊さん、[お経をあげに] 来て。わたしは、目立たないようにしてたんですけども。でも、ばれちゃって。「おお、Aさん」って。幼稚園のときからずっと一緒に遊んだりしてた仲だったんですけどね。だけど、[わたしは] なんにも言わなかった。こうだったっていうことを、いっさい、このひとには話しちゃいけないっていうので。あの、東本願寺 [派] っていうでしょ。[彼は] そこですごく偉くなって。で、わたし、やっぱり、このハンセン氏病の問題(あれ)で、東本願寺の別院 [での集会] に行ったんですよ。そしたら、[彼が] いた。むこうは気づかないでよかったんですけどね。アハハハハ。

この……、話していいひとと、話して [はいけないひと] っていうのは、ありますよね。[それをどこで見分けるのか、ですって?] やっぱりね、こう言っちゃあれだけでも、いちおう、人生経験、いろいろなのしてきたじゃないですか。やっぱり、[小さいときから] ずっと遊んでた仲だった友達、Hちゃんっていうんですけどね。お嬢さん、お嬢さんで、してたひとだったんだけど、結婚生活がうまくいなくて離婚をしたりとか、そのあと、親の面倒をみるとか、いろいろあったりして、すごく、ほんと、人生、いろんな経験をしてきた。そのHちゃんが、「あんた、そう言えばさあ、どこへ行ってたのよ？」言うもんですからね。ああ、もう、しょうがない。ああ、このひとには、話しても大丈夫

だな、って思いましたのでね。「じつは、こうだったんだあ」って、話をして。「そうだったの。あんた、苦勞したねえ」って。同級生では、その H ちゃんに話をしたんですね。あと〔の人に〕は、いっさいしらないです。

〔彼女とは、話をしたことで〕もう、分け隔てなく。こう、垣根が払われたって感じですね。ほかのひとたちには、やっぱ、垣根をつくっちゃう。ガードしちゃうのがある。その H ちゃんに対しては、もう、そういうのがなく〔つきあえる〕。

非入所で地域のひとに差別されなかったひととの出逢い

わたしがヘルパーをしているときに〔こんなことがありました〕。わたしの隣の村なんですよ。病院でそのひとに会ったときにね、見た瞬間、あ、このひと、らい病だなんていうの、わかったんですよ。だけど、園にはいっさい入らなかったんですよ、そのひと。70代か80代ぐらいの方でしたけどもね。女の方でね。その方は〔大きな農家の方で〕婦人会の会長とかそういうのもやったひとらしいんですよ。

わたしたちがヘルパーに行き、仕事をするときに、「じつは、糖尿病もあるけども、らいでもある」っていう〔事前の〕指導を受けたんですよ。糖尿病の気もあって、年をとって体が不自由になって。で、わたしたちが〔介護に〕行くようになったんですよ。もう亡くなったんですけどね。いやあ、こういうひともいたんだなあ。ほんと、みなさん、その地域のひとたちは、〔そのひとの病気のことを〕知ってて、ぜんぜん差別とかなんにもなく、普通に接してましたよね。

老後は敬愛園で過ごしたい

〔老後ですか？〕ほら、母親を看たでしょ。年寄りっていうのは、こんなに残酷なものになっていくんだなって。もう、マイナス、マイナスになっていく。できたのが、できなくなっていくじゃないですか。マイナス、マイナス、ですよ。そういうの、目の当たりにしてきてるので、〔いざとなったときには〕敬愛園（ここ）へ入りたいと思ってますけど。——わたしに対しては、母親はものすごい厳しいひとでした。最期まで。しゃべらない、っていう感じ。とにかく、しゃべらない。そうなっちゃったですね。

ただ、子どもたちが、なんて言うかですね。上の子どもたちは、いいかもわからないけど、ほら、下のが……。とにかく、〔年老いたら〕いろんな面がこう、できなくなりますのでね。敬愛園（ここ）だったら、子どもたちにも世話になることもなし。とにかく、子どもたちに苦勞をかけたので。だから、年をとって、自分が母親みたいになったら、ここへ入ったほうがどれだけ〔いいか〕。心置きなく、敬愛園（ここ）だったら、いられますからね。ここへ入ってくると、やっぱ、〔心の〕垣根が取り払われて、ホッとします。

In the Married Life of Two Hansen's Disease Ex-Patients: Interview with a Woman who was Released from a Hansen's Disease Sanatorium

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

This is the life story of a woman in her late 60s who was released from a national Hansen's disease sanatorium and re-entered society.

Ms. A was born in Kyushu in 1943. Her father was confined to Hoshizuka-Keiaien, a Hansen's disease sanatorium in Kagoshima prefecture, when she was quite young. Her mother had to take care of her children by farming. Ms. A herself was sent to Keiaien in January 1956 when she was in sixth grade. She attended the Niirada branch of Oku High School, which was built as a special school for Hansen's disease patients in Nagashima-Aiseien, a Hansen's disease sanatorium in Okayama prefecture.

After graduating, she worked at a research institute in Osaka University but had to quit after only one year to return to Keiaien because she received a letter from the doctor informing her that her father in Keiaien had cancer and needed her help. She found that her home was not a good place to live when she experienced negative attitudes from her relatives towards the history of her illness during her father's funeral, so she re-entered Suruga-Ryōyōjo, another sanatorium in Shizuoka prefecture, because she felt that there was nowhere else to go. When she was 23 years old, she became married to a man who had also attended the Niirada branch of Oku High School and had also been released from Nagashima-Aiseien. She then began her married life in Shizuoka. Though she had hidden the fact that she was an ex-patient of Hansen's disease, she still experienced much social injustice.

When she became pregnant with her first baby, she was coerced to abort her child because her husband and mother-in-law were worried about the potential of transmitting Hansen's disease to the baby. She became pregnant a second time and decided to give birth to her child. However, she could not help but worry about how the disease might affect her own health and the future of her child, so she consulted her doctor. The doctor then reported this to Suruga-Ryōyōjo, so she changed hospitals and gave birth to a girl. The delivery was difficult, however, and the doctor made a mistake during the vacuum-assisted delivery. As a result the baby was born deaf. Several years later, Ms. A also gave birth to two boys.

A little before the beginning of the lawsuit for the unconstitutionality

of the Segregation Policy, she came back to her hometown alone to take care of her aging mother and confessed her history of Hansen's disease to a select group of close family and acquaintances, including her children.

This interview was conducted on September 25th, 2012 at Hoshizukasō, the lodge for visitors in Hoshizuka-Keiaien. Ms. A was 69 at the time of the interview. The interviewers were Yasunori Fukuoka, Ai Kurosaka, Kaori Adachi, and Minami Toyoda. Ms. A said the interview was the first time she confessed her whole life story to other individuals. She also said she was up until 2:00 a.m. the night before the interview thinking: "What kind of people might the interviewers be?", "What should I tell them, and how?", "How can I share my life story effectively?"

On March 17th 2013, Ms. A approved the final draft of the interview transcript on the condition of anonymity.

Key words: Hansen's disease, Hansen's disease ex-patient, life story